

第2 教育研究団体の意見・評価

○ 全国公民科・社会科教育研究会

(代表者 山本 勇 会員数 約1,000人)

T E L 03-3737-1331

1 前文

本試験全体としての難易度は昨年度並みであったが、昨年度と比較すると受験者が正対しやすい設問が多くなったように感じられる。基本的には「公共」「政治・経済」の学習指導要領に示された学習内容に即した基礎的平易な問題で構成されていること、多めの分量の文章や資料を読み取ることで、思考力・判断力を問う出題形式が定着してきたこと、昨年度の問題と比べて、受験者を惑わす出題が減ったことで、準備をしてきた受験者は高得点を取りやすかったと思われる。また、「適当でないもの」を選ぶ形式が32問中2問で、昨年度は32問中1問であり、3～4問あった以前を考えると改善されている。

以下、具体的に各問いについて意見と評価を申し述べる。

2 試験問題の程度・設問数・配点・形式等への評価

【第1問】

〔問1〕 生徒Aのメモからaが公助、bが共助を読み取り、生徒Bのメモからcが功利主義、dがロールズ『正義論』の「格差原理」を読み取る問題であり、平易な問題である。生徒Aのメモから、aで「地方自治体の担当部署が…」とあるから公助、bで「住民が食料を相互に持ち寄って…」とあるから共助というのは納得できるが、生徒Bのメモからaが功利主義、bがロールズの「格差原理」と読み取れるだろうか。ロールズ『正義論』の「正義の二原理」についての知識が問われていると言わざるを得ない。

c・dはロールズの「公正としての正義」における「格差原理」に該当するものを選ぶ良問であるが、もう片方がベンサムで、ロールズが分かってもベンサムがあまりにも分かりやすいため、平易に選べるのではないかと考える。ベンサムの代わりにセンの「ケイパビリティ」などを持ってきた方がいいのではないかと考える。さらに、生徒Bのメモでcがベンサムの功利主義と判断することも難しくなく、設問でロールズ「公正としての正義」における「格差原理」に該当するものを選べというならば、功利主義の記述が分かり、消去法でロールズの「格差原理」を導き出せるよりも、ロールズの「格差原理」についての記述を導き出せる出題としたい。

加えて、災害時の事例と背景にある考え方を問う「公共」らしい問題であるが、生徒Aのメモと生徒Bのメモとの関連性が問題文2行目以降からしか読み取れないのが残念。「公助」と「格差原理」に該当するものを選んだときの知識・理解を問うのではなく、問4の問い方が望ましいのではないかと。

〔問2〕 経済分野から経済指標、経済成長、租税負担の公平性についての平易な問題。しかし、「社会資本」と「付加価値」、「イノベーション」と「セーフガード」と対になる用語がかけ離れており、もう少し受験者が悩む選択肢があっても良かったのではないかと。

〔問3〕 「社会保障財源の対GDP比」に関する読み取り問題。正答を導くのに知識は必要ないが、解きながら大陸型と北欧型の違いを理解させること、フランス・ドイツ・スウェーデン・日本の社会保障制度の特徴、そして、日本の事業主拠出が低い状況を考察させたいという意図が伝わる内容である。特に最後の内容については「では、企業が負担すべきか」など、授業でも指摘したい。選択肢の

記述と図表から解答を導くことは難しくないことから、図表の読み取りのみで終わらずに図表を読み取って、そこから思考・考察させる問題を望みたい。

〔問4〕 二つの考え方と社会保障制度の具体例を結び付け、考えさせる問題である。ただし、この問題はやや新傾向にあり、無条件か要件適用かを見定める組合せであった。国民健康保険（社会保険）は保険料を払っていることが前提であることを、受験者レベルでは実感がない生徒が多いのではないか。そのため、考え方 X、無条件の給付と国民健康保険の関係を誤文と判断できるか、正確な知識と注意力が問われている。その面から見れば、社会保険の概念が曖昧な生徒が多いことが考えられるため、難しく感じた生徒もいたであろう。

【第2問】

〔問1〕 生徒Aと生徒Bの対照的な会話から文脈をたどり会話文を成立させるために適切な表現を選ぶ思考力の問題であり、平易な問題である。ただし、空所アの選択肢三つの内、二つは漢字表記、一つはカタカナ表記となっており、表記を合わせる工夫は必要であると考えられる。

〔問2〕 日本で暮らす外国人の動向について図表の読み取りを通じて考えさせる問題である。資料（「人数の増加」「人数の増加率」など）を一つずつ当たっていけば、時間はかかるが正答は容易である。昨今の外国人をめぐる状況を考慮した出題だと思われ、この問題全体としてはメッセージ性もあり内容も良い。

〔問3〕 津地鎮祭訴訟において最高裁の判断についての知識を問う。津地鎮祭訴訟は義務教育段階でも学習する基礎的・基本的な知識で容易である。

〔問4〕 大学の授業で学んだことを前提とした設定で、宗教についての捉え方を紹介している点は題材として面白いが、基礎的な知識と思考力を図るもので問題としては易しい。宗教についての二つの捉え方を読み解き、具体的な事例に当てはめる良問であっただけに、空欄周辺の記述と二つの捉え方の記述を読んで解答することが可能であり、年中行事と通過儀礼は、勉強していなくても一般的な知識としてイメージができてしまう点が残念である。会話文を全て読ませて解答させる出題であってほしかった。

【第3問】

〔問1〕 自由貿易か保護貿易か、国際貿易・輸入政策について障壁重視か自由化重視かを見分ける分岐解答の設定で、具体的な政策との関係を読み取り考える問いである。形式こそ新型だが内容は簡単であった。

〔問2〕 最恵国待遇に関する基礎的・基本的な知識を問う平易な問いである。どの選択肢もそれ自体は正しい点が評価でき、よく選択肢を読んで判断しないと落とし穴に落ちる可能性があり、知識を問う出題としては良問と判断できる。

〔問3〕 2000年以後の世界のサービス貿易について基本的な構造を理解しているかを問う。「サービス貿易」の意味が具体的な経済行為と結び付くかという問題であり、概念を把握している受験者には平易だが、抽象的な概念を具体的な事象とマッチさせる問題として評価できる。プラットフォーム等の時事用語も受験者には理解させたい内容である。

〔問4〕 国連機関についての基礎的・基本的な知識を問う問題である。非常任理事国の選ばれ方や事務総長の任命方法等は細かい知識を要するが、ICJの選択肢文が分かりやすい正答なので、問題としては易しい。

〔問5〕 多国間条約の「運用上の特徴」という観点での出題は新しい。知識だけでなく、選択肢の文章を読み解き、思考力を活用して解答する点では良問である。

〔問6〕 安保理が機能不全に陥ったときの「平和のための結集」決議とパレスチナ問題についての基礎的・基本的な問題である。時事的な様子を含めて、パレスチナ問題を出題した点は評価できる。

【第4問】

〔問1〕 アは経済成長率の名目と実質の違いについて、イは世界金融危機いわゆるリーマンショックを理解しているかについて、それぞれを問う基礎的・基本的な知識の問い。計算問題ではなく基礎的な知識を問うものであるため難易度としてかなり易しいが、計算問題を入れることでより発展的な問題にすることも検討できる。

〔問2〕 日本版金融ビッグバン、アベノミクスは、現在の日本経済の動向を考える上には基礎となる知識であり、それを問う基本的な問題である。

〔問3〕 バブル崩壊、日本版金融ビッグバン、物言う株主の登場など1990年代以後の日本の金融部門の大きな変化を理解していれば容易に分かる問題である。

〔問4〕 国会のしくみについての基礎的・基本的な知識を例に基づいて具体的に考える問題。全体的には正確な知識と判断力を要する良問と言える。問題中の設定も込み入っておらず、定期考査でも使用が可能である。より発展的には、両院協議会で一致しないという条件設定も考えられる。

〔問5〕 日本国憲法における自由権の規定、特に経済的自由についての知識を問う基本的な問題である。

〔問6〕 違憲審査権の行使を異なる立場からその根拠について考える問い。付随的審査制と抽象的審査制の違いを踏まえ解答させる点は、思考力を問う問題であると評価できる。ただし、第3問の問1と同じような出題形態であったので、例えば、立場a、立場bの考えと一致する記述の組合せとして最も適当なものを一つ選ばせるという出題でも良かったのではないかと考える。

【第5問】

〔問1〕 見た目だけでは判断できず、きちんと計算しないと間違えるという高度な読み取りを要求しているが、二つのグラフの読み取りを組み合わせるような選択肢があるとより良いのではないだろうか。また、後半部分で時間的にも焦り出す生徒はケアレスミスが起りやすいため、問題の本質的でない部分で間違ってしまうような選択肢は避ける方が良いと考える。

〔問2〕 水道事業（広域事業化と効率性）を例に説明文を読み、文章の趣旨を理解して空欄を補充する思考力・判断力の問題。公共経済に絡むテーマで題材は面白い。今後の日本社会のことを考えるきっかけになる問題であった。

〔問3〕 地方財政に関する問題。正確な理解に基づいた知識と判断力が問われる。問題はシンプルだが簡単に正解できない問題である。自主財源と依存財源の本質が分かっていると答えられないという意味では良問。ただ覚えている知識を問うのではなく、国と地方との関係を問う①・②などは考えさせる良い選択肢であった。

〔問4〕 地方自治における直接民主制の要素や議会と首長の二元性についての問題。②が正答なのが分かりやすいが、③は国政にない拒否権であり、細かい学習が必要となる。④は伊東市、前橋市などでこの問題が話題になったことも踏まえると、時事問題に触れている受験者には分かりやすいだろう。

〔問5〕 宿泊税を題材に税や需要曲線の本質を問うもので、社会的課題の解決に向け、構想する設問。題材としては、様々な知識や理論を活用して考える良問と言える。改善提案としては、応益負担と応能負担は聞き慣れていない受験者もいることが予想されるので、もう少し丁寧な説明があっても良かったと考える。

〔問6〕 NPOや企業の実態についての知識を問う。アの法人格取得については、知識として問う内容が細かすぎると考える。企業の不正会計等の事例が後を絶たないことを鑑みると、ウの企業の社会的責任やコーポレートガバナンスの方が出題に適していると考えられる。

【第6問】

〔問1〕 国際社会における格差と貧困に関する基礎的・基本的な用語の理解を問う問題。「重債務貧

困国」は前後の記述を読めば、簡単である。

〔問2〕 地球環境問題へのわれわれの取組の流れを問う。年号を「覚える」のではなく、どういう形で取組が進んで今日に至ったかを「理解する」ことが大切な問題である。

〔問3〕 世界のエネルギーへの投資額、二酸化炭素の総排出量、二酸化炭素の一人当たり排出量のグラフを見て、グラフの国名を当てる問題である。必修科目の地理総合で学習する内容とも重複するが、(科目間の連携により)その知識を活用するという観点からは良問である。

〔問4〕 SDGs の図と会話文に沿う説明を選ぶ問題である。特に引っ掛けもなく、シンプルな問題であったため、読ませるのであれば、知識をより活用しないと解けない問題等、もう少し難易度を上げて良かったと考える。

〔問5〕 大学進学後の調査方法についても分かるように学び方を学ぶ問題。この問題は、大問の探究的な視点を示した小問であり、設定は面白いが読み取り自体は平易である。ただ受験者的には最後まで続く読み取り系の問題で、息切れせずに読み解く力も求められたと言える。

〔問6〕 SDGs への理解というより軍縮条約や安全保障に関する基礎的・基本的な知識の問い。Aについては、パグウォッシュ会議も科学者を通じた多国間交渉のような印象をもつ可能性もあるので、Aの誤答はもっと内容的に外した方が「安全」であるとも言える。日本被団協を提示したことは時事的な視点を示したものとして意味があるが、「公共、政治・経済」を締めくくる問いとして、受験者へのメッセージを残すものとなっても良かったのではないか。

3 総評・まとめ

正確な知識を問う設問が多い印象(時事的な要素)を受ける。例えば、三つの文それぞれの正誤を的確に判断しないと正答にならない正誤問題が3問あり、より正確な知識、理解が求められていると言える。一見、細かな知識・理解が問われていると思われる設問でも正答肢は基礎・基本的事項であり、高等学校現場としても納得感がある。

4 今後の共通テストへの要望

知識面での定着を図りながら問題形式を工夫し、なおかつ思考力等を問う問題を、「公共、政治・経済」分野からある程度満遍なく出題することが困難なことであることは、現場の教員としても理解している点である。一方で、資料としての文章を読ませる問題が増えてくると、「読解力で解くことができちゃうのではないか」、「受験者に読ませる内容、量として適切であるか」という学校現場からの指摘も生じる。共通テストでの出題が教科書等の内容につながり、次年度以降の高校生の学習内容となることから、受験者にどのような学力を問い、公民科各科目や分野、出題形式のバランスをどう取るのかという点については、今後とも検討を重ねていただきたい。